



愛隣幼稚園・・・・・・・・・・・・・・・・

園だより

・・・・・・・・・・・・・・・・ 12.2月号

## 「親」をする

寒い朝、いつものように門に立ちます。今日もまた至福の30分間が始まります。お家の人の中には「先生、寒い中、大変でしょう」と気遣って声をかけて下さる方もいます。でも、どうぞご心配なく。冒頭にも書きましたが、この30分は私が幼稚園中の子どもたちと会うことができる貴重な時間であり、至福の時なのです。「おはよう」の一言を交わす一瞬がこんなに楽しいとは・・・「おはよう」が言える子、言えない子、言わない子。そのどの子もがその日その時の自分を表現しています。これが、皆同じに判で押したようなお行儀のよい「おはよう」だったら、こんなに楽しい時間にはならないでしょう。(もちろん、挨拶はきちんと出来るに越したことはありませんが)まさに、“みんなちがって、みんないい”のです。でも、おうちの人は私と同じように楽しむ気持ちにはそうそうなれなかつたりもしています。声も出さずあっちの方角を見て通り抜けていく我が子を見ながら、「まったく、すみません。いつになったら言えるんでしょうねえ」と恐縮して下さるのです。それでもしばらくするうちに、「おはよう」とは言えない我が子が、“言えない”ということ自分で表現していることに気付いて下さることがあります。「おはよう、言えるか言えないか」だけに向いていた心もちが、言えないでいる我が子が表現していることに向けられた時、おうちの方たちの肩からふっと力が抜けていくのを感じます。“何も言わないでこの子ったら・・・ああそういうこと。”こんなふうに気付くだけで、親であることを楽しめるようになってくれているように感じます。ここからが子育ての楽しみ、おもしろみ。私は長女の子育てにこれを味わうことが出来ませんでした。子どもはこうあるべき、そして親もこうあるべき。と思うあまり、そこにある我が子の心もちには、気付くこともなくその時は過ぎていました。離乳食はほぼ手作り(必死)、絵本だって毎日欠かさず読んでいました。こうあるべきことには一生懸命でしたが、子どもが向ける眼差しや仕草、泣いたり怒ったり黙りこんだりする中に表している思いには気付きませんでした。私が子どもにして私が満足することにばかり心が向いてしまい、子どもが私に求めていることには、気付きもしませんでした。結果、子育てを味わい、親であることを楽しむこともできませんでした。

倉橋惣三(日本の幼児教育の基礎を築いた人として知られている)の著書の中にある言葉です。『ちと極端ない方かも知れないが、子というものは親から教育を与えられたいなどは願っていない。願っていることは、親その人を与えられたいことだ。親が欲しいのだ。親が味わいたいのだ。』

「おはよう」と挨拶が出来るようにと親は子に願うけれど、子がして欲しいことは、「おはよう」と言えない、言わない自分の心もちを「ああ、わかっているよ」と受け止め包みこんでこんでくれる親が欲しいのです。そうして安心して満足したら、自然に「おはよう」の挨拶もただ言うのではなく、気持ちのこもった挨拶としてできるようになるのでしょうか。同じ著書の中で惣三はこんな事にもふれています。『一体、母のまむきは、見せる見せないでなく我が子としての何よりの喜びである。』と。耳の痛い言葉です。私が娘たちと正面で向き合う時(まむき)の表情の多くはしかめっ面のこわい顔でした。あなたが大好きと笑顔で向き合うことのなんと少なかったことか。後悔します。成人した娘には「大好きいっぱい笑顔のまむき」はやはり今更の感があります。

今を逃して後からでは、足りなかったものを補うのに苦労します。そしてどんなに頑張っても十分には補いきれないかもしれません。今、我が子から求められている「親」を十分にすることは、私たち「親」の務めです。楽ではありません。頑張ることも求められています。でも同時にそうして「親」をする日々が、子が親を味わうように、親も子育てを味わい、親であることを楽しむ日々になることを願っています。